

---

# 異世界から召喚されて

赤兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界から召喚されて

### 【Zコード】

Z6576

### 【作者名】

赤兎

### 【あらすじ】

死んだはずの主人公は異世界で新しい人生を送ることになる。

主人公は幸せな生活をてにできるのか！

そんなお話。

## 1、(前書き)

どうも、はじめまして赤兎です。

あまり更新できませんがよろしくお願ひします。

一、

俺は死んだ…。

なぜ死んだかと言いつと、交通事故にあったからだ。

どうして死んだか分かるのかと言いつと、自分の死体が目の前にあるからだ。

死因、内蔵破裂及び脳挫傷。

即死だった。

「この世界に生まれてから17年、あっけない終わりだ。

…今さら自分にはなにもできない。

そんな時、目の前にブラックホールのような小さな穴が現れた。

どうせ死んでいるのだ、今さら怖いものなどなく、その穴に触れる。

「なつ！」

触れた先から消えていく。

吸い込まれるのかと思っていたので正直、驚いてしまつ。

存在すら消えていく」とに多少悲しみはあるが… もつ諦めぬ」として、  
にした。

そして…世界は暗闇に包まれた。

…………何処だ、ここは…………

寝た状態から起き上がる。

辺りを見渡すと魔方陣のさくらんぼ中心に自分が寝ていたことに気が付いた。

そして…なにより、肉体がある。

魂だけとなってしまったはずが、またいつしても肉体を持っている。

「どうなつてんだよ

独り言を呟くと誰かが息を呑むのを感じた。

「誰だ？」

その人物に向かつて話しかける。

「あつ、申し訳ありません！私はヒナと言います！」

自己紹介して欲しかった訳ではないのだが、まあ、危ない人間ではなさそうなので安心した。

「それはいいが…」ヒナはどこだ？

とりあえず、自分の状況が知りたい。

「えっとですね、ヒナはカルラ帝国の魔術学校です

なんて言った…今

「すまん、君はもしかして頭が痛い子なのか？」

「なんでそうなるんですか、私嘘なんて言ってないですよ」

つまり、ここは違う世界な訳で、俺はそこに来てしまったと。

「で、俺はどうやってここに来たんだ、それがいまいちよく分からん」

だつてさ、俺消えたはずなんだもん。

「ああ、それはですね、私があなたを召喚したからです」

「あー、確かに、魔方陣あるし、そなうなんだろうな

まあ、復活できたし文句はないけど。

「はいっ！初めて召喚に成功しました！それに普通、人形の使い魔はあまり居ないらしので凄く嬉しいです」

あー、俺使い魔になっちゃったのかよ、まるでゲームの世界だな。

「申し訳ないが俺は弱いぞ、魔法は知らんし」

「そんな訳ないじゃないですから使い魔が魔法使えないなんて…ホントに使えないんですか？」

「ああ、そんなものは知らん」

ヒナはそれを聞いてガクリと頃垂れてしまったのだが…仕方ないだろ、ホントに使えないのだから。

「せつかく成功したのに、魔法使えないのか、しかも弱いって言つてるから弱いんだろうな」

なんか、むかつくなこいつ。

まあ、言つてることはあつてるし仕方ないか。

「なあ、契約は切れないのか？」

「無理です、契約は生涯で一回しかできませんのでその召喚したものと死ぬまで一緒にです」

「どうか、何となくわかった、まあお互に諦め合つ

「そうですね…仕方ないですよね」

涙を浮かべながら彼女は諦めたようだ。

「あ、仲良くなれ

「やうやくお願いします

そんな会話をじてとうえず、名前を教えておいた。

「俺は彼方 悠だ、悠と呼んでくれ

「カナタ ユウさんですか、変わった名前ですね」

「確かに、変わった名前だと自分でも思つよ

「それでは私の名前ですね。私はイーナ・ヒナ・シャイナと言います、ヒナと呼んで下さこ

名前の部分つて真ん中なんだなー、ま、異世界の常識なんだし仕方ないが。

「それでさ、ヒナ…話は変わるんだが」「は学校なんだろ、俺はどうすればいいんだ？」

「ああ、それなんですが…使い魔は腕輪を着けていれば学校にいいんです」

腕輪が、首輪じゃなくてよかつた。

「まあ、なういこいんだけど、とりあえず、この部屋から出た方がよくないか？」

あれから、召喚されたままずっと話していたのだが…はつせつ言って外がどんな世界を見てみたい。  
その為に腕輪の話をきいたのだ。

「やうですね、いろいろ知りておくれ」とも必要なことですし、出ましょひ

そして立ち上がりドアに近寄る。

「では、この腕輪を着けてトドセー」

出よひとした時に腕輪を渡してきた。

凄く透明で、綺麗な虹色の光りを放っている。

「これさ、腕のサイズにあつてないんだが？」

「ああ、それはですね、つける瞬間に勝手にサイズが変わる優れ

ものなんですよ、だから大丈夫ですよ」

まあ、ならいいか、つけよつ。

カシ！

おう、確かに、サイズが変わった。

「なー、色まで変わったぞ」

「それなんですが…実はその色は実力によつて変えてもらえるんですよ、学校で召喚したものは審査員に見てもらつて、判定してもらつまでは白い色をします。」

確かに、白い色だな。

「なあ、審査は今から受けれるのか?」

「はい、でも正直、受けたくないですよ、だつて私学校で落ちこぼれなんで、その使い魔も弱いとヤバいんですよ」

「どうヤバいんだ?」

「魔術書の回覧ランクが最低になります」

つまり、高度な魔術は勉強出来ないことになるのか。

「でも正直、学校なら授業だけでもある程度やるんじゃないのか?

？」

「はい、普通は皆わんランクは気にしないんですが、私は名家の生まれで、その、ランクは重要なんです」

「こつはけへじつ重荷背負つてるんだな。

「もしかして、呪喚に望みをかけてたのか？」

「はい、呪喚で強い者が呼べばランクがあがるんですが…失敗しました…」

最後の頼みの綱が…俺だったのか。

なんか、申し訳ないな。

「なあ、とりあえず、審査員のところに行つた方がよくないか？」

「そうですね、現実を受け入れましょ…グス」

ああ、泣いてるよ。

本氣で申し訳なくなつてきました。

そして…「んびりと部屋から出て歩きだした。

外に出ると、まるで王宮のような豪華な作りの廊下で、自分が場違いであることを指摘された気分になる。

それから暫く無言で歩いて行くと

「あら、落ひこまれのイーナさんではありますか？」

田の前にツインテールの女子生徒が出てきた。

「そうですね、落ちこぼれですよ、なにか」用ですか？」

「いいえ、べつに用事はないのですが」とよ、ただ、あなたが召喚でなにか出せたか見に来ただけですの」

「ゼー女だなこいつ。

「この様子ではまた失敗したのですか?」

「いいえ、隣にいますよ」

キョトンとした田で俺を見る。

「彼ですか?」

「そうです」

そして……女はニヤリと笑って

「なら、私の召喚獣と戦かわせてみません?」

「いや、それは……」

「わかった、戦つてやる」

腹がたつたのでつぶさになってしまって、ヒナが青ざめて

「死んじやいます！やめて下さー」

と言つてくるが、バカにされたのだ、なら、戦つてブチ殺してやる。

「ヒナ、死んだら他の召喚できるんじやないか？」

「できます、でも…」

「気にするな、所詮、俺は一回死んでる」

「え」

呆然とするヒナをおいて、ツインテールに着いていく。

そして…現在、広場

向こうの召喚獣はユニークーンだ。

かなりのランクらしい。

だけど、関係ない。

「ああ、初めてちょうどい」

俺は覚悟を決めた。

なにがあるようと勝つて見せると…

## 一、(後書き)

感想などありましたらよろしくお願いします。

## I. (前書き)

「でも、赤鬼です。

貴様へん呼んでくれて有難いござります。

こんなに読んでくれる人がいたことに驚いている自分がいます。

「でも、これからもよろしく…」

さあ、じゅするー。

キレて戦うことになつたが…正直、死亡フラグ全開だ。

そう言えども、昔、爺さんが教えてくれた武術がつかえるが…効くのだろうか？

爺さんが言うことは人に当てたらいけないと言われてたし練習だけで実戦経験がない。

だが…ここはそれに頼るしかない。

その時ユニコーンが動いた。

「使うしかないよな」

そして…ユニコーンの方へ意識を集中する。

角の辺りからなにか強い力の反応を感じた。

恐らく、角からなにか出すぎだ。

だが、攻撃がくるのがわかれば、後は避けてこちらの攻撃を打ち込むだけだ。

なら、接近あるのみ！

「あら、あの落ちこぼれ召喚獣突っ込んで来ましたのね…ばかなのかしさ？」

「駄目ー、悠、死んじゃうよー。」

まだ、判らんだろ！

勝手に人殺すなよ…まあ、皆さん俺がただ突っ込んで行ってる様にしか見えないからしじうがないか。

そんなことを考えていると攻撃が迫ってきた。

「第一歩の型、流世」

身体を一瞬で軌道から反らす。

皆なにが起きたのか分から無い様でそのままに、ゴニーポーンの前にたどり着く。

「第一歩の型、曉」

ケリをゴニーポーンの顔面に叩き込む。

「ド、ゴー！」

鈍い音をたて、ゴニーポーンは吹き飛ぶ。

「なつー。」

「えつー。」

ヒナとツインテールが驚いているが、自分が一番驚いている。

なんせ、当たったことがなかったのでここまで威力があるとは知らなかつた。

「爺さん、助かつたよ」

しの崎ほどの爺さんに感謝したことはなかつた。

「 がああああ 」

それもつかの間のことだつた様でユニコーンは起き上がつて來た。

「暴走してゐる、悠！逃げよ」

「ああ、わかつた」

そして…走りだそつとして氣が付いた。

ツインテールの方にユニアーノンが突進して行くこと。

「あ、いや、止まつて……いやあああああ……」

くそ、間に合わない。

どうする、なにかないのか？

ドク！

なんだ、体が熱い！？

「くそ、なんだよ、うぐ、があああああ……！」

…………覚醒の時はきた……我が後継者よ……力をくれてやる……

頭のなかに声が聞こえてきた。

…………我は…………神…………そして…………もはや存在せぬ神…………だが…………  
波長が合つ…………者が…………現れたならば…………我が力は…………受け継がれ  
る…………

なに言ってやがるんだ。

…………これは…………残留思念…………私からの…………願いとともに…………力を  
たくす最後の…………使命

使命？

…………世界を…………救え…………奴を止め…………るのだ

そこまで言われ俺は現実にもどる。

奴って誰だ？

とりあえず、今はゴニーポーンを止めないとマズイ！

「第九の型、片吹！」

なぜかゴニーポーンの前にたどり着く。

おかしい、こんなに速く移動出来るなんて！

そして…ゴニーポーンの腹部にてつもなく速い拳を叩き込む。

今度は吹き飛ぶことはなく、だが、拳はめり込んでいく。

この技は殺人専用の技で内臓 자체を攻撃すると爺さんは言っていた。

「くたばれ！」

「シッ！？」

ゴニーポーンは声すら出さず、倒れた。

恐らく、死んだだろ。

「悠、あなた強いじゃない！？」

「いや、たまたまだ」

「まあいいよ、とりあえず、あの人のことどうとかしないでよ」

ツインテールの方を指差し言つてくる。

「はいはい、わかつたよヒナ」

正直、面倒だけどね。

「これでアイツのことはバカにしないで貰えるかな?」

「ええ、こんなものを見せられたんですね。……そんなことをすれば、私が危ないことなど見たらわかります」

ああ、泣いてるよ。

「この世界の女性はよく泣くな。

「それで貴方の名前を聞いてもようじいかしら?」

「……彼方 悠だ」

「そりですか…私はクラーク・ラル・シークと聞こます、ようじ  
く悠さん」

「よろしく~」

その時、なぜか俺は意識を失った。



一、(後書き)

がんばつまわよ。

### 三、(前書き)

以上。

暗く、広い世界。

自分が生きてこる感じがしない。

自分はどうなつてしまつたのだろうか？

「……なんなんだ、ソレは……」

「ソレは神の住む場所だよ」

「シーッ！」

後ろを振り向くと、そこに銀髪の青年が立っていた。

「どうこう意味だ

「あれれ～？ あのお方の残留思念から教えてもらつていいだじょ、お前は選ばれたって？」

心底不思議そうに呟つてゐる。

「説明するとな～、前の神は星を救つ為に星と同化して消えたんだよ、でもさ、ホントはそんなことはしてはいけないんだよ、だって神の席を空けることになるし、世界の均衡が崩れてしまつ。だから…自分の席に誰かを座らせる」とこしたんだよ」

つまり、後釜つてことか。

「で、俺は神になつてここに居ないといけないのか？」

すると首を振る。

「いや、ただ普通に生活すればいいだけでここに来る必要なんてないんだよ、だつて人の寿命は短いから無理だしね～、神のまねなんて」

「だが…居ないとマズイんだろう？」

正直、内容が噛み合つてない気がする。

「あー、『』めん、僕は説明がへだから、分かりにくいと思づけどさ、簡単に言つと神がいることにするだけで、実際は神の力の一部を人に植え付けてダニーを作りだしただけなんだよ。これで力のバランスがとれるしね～」

「だいたいわかつたよ、だが…寿命とかどうなるんだ？」

不死身だつたら凄く嬉しい。

「いや、普通だし、それに死んだら次の奴を探すことになつてる

「うわあ、こいつら適当だな。

「一つ聞きたいんだが、あの残留思念が言つてた『奴』って誰だ

？」

「ああ、あれはもう終わったから『死』しないでいいよ、だつてもう死んでるから」

はつきり言ひて拍子抜けした。

今から敵と戦つていく展開だと思つてたから、なんか虚しい。

「だからさ、平和な人生を送つて下さいな。それではさようなら

」

「……さん」

「……ゆ……わ……」

「起きてください、こんなところで寝ないでくださいー。」

「……」

田を開ける。

ん？なんかヒナが手を振り上げてる？

あれ、ものす！」  
速さで降りてくる。

バシツツイ！

「いっつづ！」

声がでないほど痛い！

顔が変形したんじゃないかこれ？

「もう少し優しく起しそー！それと、起きた瞬間叩くなー！」

涙目で訴える。

「私は叩いてないですよ」

顔をそらしながら囁く。

「ほう、なら証人がいるがどうするかね？」

ツインテールが居たので囁いてみる。

「ええ、この田でしつかり見てました」と云ふ

「ううー、めんなさい」

逃げ場がないことに気が付き謝りてくれる。

「許します……と思つてんのかー……」

「ヒイイー？」

「はあ、嘘だよ」

縮こまつて頭を手で押さえているヒナリがつてやる。

「嘘める反対……」

「何か？」

「いえ！何でもないわこません！」

分かりやすいなこいつ。

「ヒハー。こんなことしつる暇ないですよ！審査受けないとー。」

「行つてら「張本人が行かないでどうするんですかー」「めんなさい」

ツインテールを放置して俺達は審査員のところに行く事になった。

だが…大丈夫なんだろうか？

「ちおう、神さまの力を内包してるんだが……まあ、いいか。

三、(後續書)

九〇八一

## ラルの視点（前書き）

あー、なんか更新してしまった。

勢い任せでやつれました！

じつじよひ……

## ラルの視点

ラル視点よりお送りいたします

私は何を見ていたのだろうか？

あんな動きは見たことがない。

ゴニコーンはランクで言えば、上位の雷を司る最強種だ。

その雷を軽くよけ、一瞬で攻撃をした。

何も見えなかつた。

あれは何なのだろうか？

そんなことを考えていると、ゴニコーンとの繋がりが切れかかっていることに気が付いた。

「がああああ」

だが…遅かつた。

気が付くのが遅かつた。

必死に叫んで止めようとした。

止まらない。

もう駄目だ。

私は死ぬ。

死にたくないよ！

その時彼が、田の前でコニーハーンを殴っていた。

瞬きの間のほんの僅かな時間だった。

「カツコイイ…ですわ」

誰にも聞かれないほど小さな声で囁く。

そこで、彼が近づいてくる。

「これでアソツの」とはバカにしないで貰えるかな?」

「ええ、こんなものを見せられたんですよ……そんなことをすれば、私が危ないことなど見たらわかります」

バカにするビンガ、彼に惚れそうだった。

「それで貴方の名前を聞いてもよろしいかしら?」

「……彼方 悠だ」

「そうですか…私はクラーク・ラル・シークと言います、よろし

く悠さん

彼は微笑み

「よめこくへ

と、一言喋り、倒れた。

て、倒れましたわ！

「大丈夫ですの！」

「ぐー、すー」

寝てますわね。

完全に寝てますわね。

「じょうがないですね、寝かせて「なにねてるんですかー悠さんー起きてくださいー死んじゃ黙田です」……死んでないですわよ？」

「え、あつ、ホントですね。まあ、とりあえず、起いひれなことー」

その後、暫くはこんな感じが続き、私の出番はなくなってしまいましたの。

## ラルの視点（後書き）

本編はまたのお楽しみに！

四、(前書き)

短い

四、

審査員室に着き、ドアを開ける。

そこには爺さんと婆さんが待っていた。

「一皿でいいと花がない！」

やる気が無くなりそうな感じだ。

「こつまで待たせるのかね、まつたべ、まつ少しで帰るとこだ  
つたぞ」

一番偉そうな爺さんが呆れた感じで話す。

「すみません、少々問題が発生して……

「まあよー、それで、その者が召喚された者か？」

「はー、そりです

ヒナ緊張してるな。

ま、どうでもいいこだ。

「まあーあ

開こうよまつたぐ。

「うつむき、悠さん！もう少し場をわきまえて下さい。私の評価  
が更に下がるじゃ無いですかー！」

小声で叱られた。

「すみません、でも、熙...N N N N ...」

「それは熙いんじゃなくて寝てますよー起きてくださいー。」

「はつー死んだ婆ひやんがー！」

「変な川なんか渡つちや駄目ですよー寝ぼけてないでちやんとし  
て下せーー！」

「あれ？婆ひやん若くなつた？」

「私は悠さんのお婆様じゃないですよー。」

「母さん？」

「それも違いますー！」

「あれ？違うなら誰？？」

あー、ヒナか。

そりだ、今、審査員の前にいるんだった。

「話はすんだかね、ん？」

「すみませんでした」

ヒナが謝る。

「早くしてくれ、眠いんだ」

俺は思つてこないとそのまま蝶づ、ヒナに睨まれた。

「悠れん、ちやんとしてぐだせー」

恐いよヒナわんー顔が般若だよー

「あー、あー、その、すまん」

騒ぎは収まり、てか、切れてた爺さん達もヒナの顔が恐かつたのか

「わー、わー、始めよつかのー」

と必死に言つてゐる。

てか、どんな審査をするのだろうか？

#### 四、(後書き)

次の更新は日曜日です。

## 五、(前書き)

うーん、話がぐちゅぐちゅだ。

それに、一日早い更新になってしまった。

五、

審査はまず、魔力審査だそうだ。

「あの、その禍々しい機械で計るんですか？」

なんか電気椅子の様な機械の椅子が運び込まれてきた。

「そうだ、まあ座りたまえ」

「……」

しあうがないので椅子に座り、身構える。

「では、電流を流したまえ」

やつぱり電気椅子なのか！

バリバリ！

「ううーー！」

ヤバイ！殺される！

「止めよ

電流が止められ、何とか助かつた。

はつせりつ語りて、こんなやり方で本当に魔力測定でれるのだれりか？

「ひむ、出てきたぞ」

出たらしい。

てが、こんなやり方は間違つてないか？

もつと違うやり方探せよ！

くせ、でも結果が気になるから全否定はできない！

「どうなんですか？やつぱり魔力無いんですね」

ヒナが早く聞きたいらしく、爺さんを急かす。

「いや、魔力はあるのだが

「やはり少ないんですね」

はあ～、とため息をヒナがつく。

「耳とちりするでない、はつせりつ語りて、魔力が大き過ぎるのじ  
やよ。こんな奴を見たのは始めてじや」

ヒナはそれを聞いてポカーンとしている。

「まず、魔力はな、生命力が源と言われておつて、その生命力以  
上の魔力は普通ないのじや」

「それで爺さん、俺の魔力はどうなってるんだ？」

「お爺さん、俺がまるでゴキブリ並の生命力だつて言いたいのか？」

余計気になるからそんな言い方やめて欲しい。

「はつきり言って、召喚された今までの者達はこの理の範疇であつたのだ。だが……お主の魔力は……既に生物の範疇を通り越しておる。強いて言つなれば神……じゃな。それ以外では説明がつかん」

あー、あの残留思念のせえか！

あのやつは、なんて」としゃがる…

「それでの、まだ終わりではないのじや」

まだあるのか？

「生命力は見ることができるのじや。そういうつた魔法があつて、今さつき使つておつての、お主を見たのじやがゼロなのじや」

もしかして、事故で死んだせいか？

「つまり、お主は魔力の固まりだ」

てことは、魔力使えば死ぬのか？

「お主、なに者のじや？」

あー、説明しなくっちゃならんのか。

説明中

「信じられん、では一度死んでしまい、この世界に来たのじゃな  
?」

「ああ、そうなる」

あえて、神のことは伏せた。

言つてしまふとなにされるか分からん。

「ふむ、ただの人から召喚獣になつたのか、まあ、人間は召喚されることはないからの、魂だけになつたことで人間として、認識されなかつたのじゃね?」

とりあえず、俺のことは人間として見てくれないのだろう。

「で、俺は召喚者といっていいのか？ 危険だから殺すって言つたじやないよな？」

老人たちはポカーンとして、

「ハハハ、そんな」とはせんよ。暴走するか、もしくは悪意があると判断した場合は殺すことになるがの」

まあ、今のところ大丈夫らしい。

「でも、次は何すんだ」

「ああ、戦闘能力をはかる審査じや」

と書いて、別の部屋に移動した。

それは、部屋と書いて、闘技場だった。

「まず、我々が用意した召喚獣と戦つてもうひのじやがよいのか？」

「ああ、構わない」

こんなやりとつをしている中、ヒナはまだ、ポカーンとして、現実逃避していた。

「つむ、ではグリムと戦つてもうひのかの」

「グリム？」

「下級の悪魔だよ。だが、油断していると、つけこまれるぞ。強い召喚獣は大概油断して負けたことがあるからな。」

ハハハ、そんなこと教えていいのかよ。

「わかった」

では、始めよう。

弱き者が、強き者を倒す技で。

「ああ、中心にある闘技台の上で待つておれ、すぐに連れてくるからな！」

とりあえず、闘技台の上で待つことにした。

どんな奴なんだろ？

グリムなんて聞いたら、何だか化け物な感じがするな。

実際、まだ見てないから何も言えないが…

「きゅ～う」

何か台に上がってきた。

犬？

じゃないな、よく分からんが……可愛いな。

「では、始めてもらおつかの」

犬？対人間モドキの試合が…今始まった。

「まあ、早く終わらすか」

構えをとり、犬？を見据える。

「第七歩の型、秋雨」

歩きながら近寄る姿は隙だらけに見えるこの技だが…これはそんなに優しいものではない。

相手の動き次第で、様々な攻撃ができる。

ただし、自分から仕掛ける技でないため、攻撃されなければならない。

だから隙だらけにしているようにしている。

「ガバッ！」

可愛い犬？は口を大きく開く。

ただ、開く幅が大き過ぎるので。

はっきり言って、軽く人間など飲み込むだろ？。

だが… これでアイツは罠に掛かった。

わあ、どう来るかな。

見てみると、正面からただ突っ込んでくる。

口のなかは歯の様なものが奥のほうまでびっしりあり、全てがぐにゃぐにゃ動いている。

あまり、気持のいい見た目ではない。

目の前まで来たので流れるように攻撃を受け流しながら心臓のあるであろう場所に拳を叩き込む。

だが、まだ終わりではない。

この技は、次に脳を破壊する。

その方法は今、叩き込んだ拳をそのまま頭の方へ振り抜くという簡単だが難しことによつて起くる。

心臓を圧迫し、それにより脳の血管を切るのがこの技だ。

つまり、その為に拳を頭の方へ振り抜き、心臓を圧迫され血液の逃げ場がない状態なので血管が切れる。

「グキュ！」

グリムの田玉が飛び出る寸前までに見開かれる。

「決まつたな」

グリムは立つたまま死んでいた。

「爺さん、この技は何処で考えたんだよ」

自分の爺さんが少しづつ、怖くなってきた。

## 五、（後書き）

明日更新しようか考え中。

## 六、始まり（前書き）

更新遅れました、すみません。

## 六、始まり

「この審査を見ていたものは今までにない恐怖を感じた。

グリムは普通の召喚獣審査では使用されない。

より、強い召喚獣がでた時だけ使用され、そのへんにいる召喚獣では間違いない一瞬の内に喰われてしまう。

だが…「この少年はなんなのだろうか？」

喰われるどころか、瞬きの間のほんの一瞬の間、その時にはもう、グリムは死んでいた。

あのお嬢さんはとんでもないものを召喚してしまったのではないだろうか。

「この先、彼が敵とならなことを願おう。」

審査員 議長 アーク・アド・ラレンツィア より

宛先

クリマ・ナイア・メセッジ学園長殿へ

あれから、ヒナはなかなか現実逃避をやめない。

心、ここに有らず。

こんな感じだ。

「なあ、ヒナ、もう夜だよ。審査が終わってからぼーっと立つたままじやん。お腹すいたよ？ 眠いよ？ 風呂入りたいよ？」

そこでやつとヒナがこちらに向く。

まるで、ブリキの人形の様に、ギギギギ、と音が聞こえそうな首の動かしかただ。

「ひつー。」

思わず悲鳴をあげそうになる。

ホラーだ。

ホラーだよ。

リーグのテレビから出でてくるお姉さんみたいだ！

現実でやるなよ、相手が知らない人なら、『氣を失うよ？

「……弱いと言つてたじやないですか？……」

息を呑む。

目が、カツと開いてギョロココと見てくる。

もうやめて！怖いよ！

「え、あ、えつゝ、その、ですね、弱いと言つていたのは……す  
まん、でも、この世界に通用するはずないと思つて……ですね、だ  
から……」

「怒つてるんじゃないですよ。ただ、嬉し過ぎてこれが現実な  
か分からなくなってきたんです。本当、びっくりします、そして  
…有難うござります。私の召喚獣さん！」

ああ、なるほど。

嬉しいのだが…どうすればいいんかわからなかつたのか。

しかも、弱いと言つていたのに余裕だつたし、そりや驚くよね。

「これからもよろしくお願ひしますね…悠さん…」

「ああ、よろしく、俺のご主人様」

何か、やばい世界の人の発言に聞こえそうな感じだが…この場は  
そんなふうには聞こえないだろう。

ひつして、俺とヒナは出会った。

## 六、始まり（後書き）

次から本編です。

七、飯、食べず（前書き）

ああ、妄想の產物。

## 七、飯、食えず

世界は非常だ。

戦争、飢餓、暴力と言つ、人間の惡意の產物。

世界は……神は……人など、どうでもいいのだろう。

戦争により、親を無くし、嘆く者のを助けただろうか？

戦争により、子を無くし、嘆く者のを助けただろうか？

答えは……否

なぜ、人を救うことをしないのか？

答えは……人は自分で助からなければ意味がないからだ。

英雄 ガラム・アト・ルシア

カルラ帝国 第一図書館より選抜

英雄の書より

「すみません、なんで俺、捕まつてるんですか？」

そう、今、彼は帝国の兵に捕まつてている。

「すみません、教えてもらひついでですか？」

王宮の廊下を歩きながら、兵は無言で悠を連れて行く。

ふと、兵が立ち止まり、大きな門をノックする。

「入ってよいぞ」

「ハツ！」

その畳に反応して、兵が訓練されているのか、いい返事をする。

「すまん、後は中のお方に話を聞いてくれ。私達もいろいろ教えてもらひつてないのだ」

ああ、そんな申し訳なさをいたされると、困るんだが。

「わかりました、お疲れをまです」

では、と言つて去つて行く。

そして…扉を開けながら今日の朝のことと思い出す。

朝

昨日、この世界に喚ばれ、いろいろあつた後、俺はヒナの家に行つた。

そして…疲れていたので用意された布団ですぐに寝てしまい、あまり家のことを見なかつた。

そして…驚愕した。

なんだ、この豪華な家は！

天井にはシャンデリア、寝ている布団はキングサイズより大きなものだ。

「こ、逃げたい」

「それは駄目ですよ？」

ヒナの声がしたのでそちらを向く。

扉のところにちょこんと、ヒナがいる。

「こ、本当にヒナの家なのか？」

俺は思わず聞いてしまつ。

「そうです、昨日見てな……あー、そうですね、昨日は勝手元の部屋に入つて寝てしましましたから、よほど眠かったんですね」

うん、会つて昨日元なのに、俺のことよくわかつてるね。

「まあ、あれだけ眠つて言つてましたししうがないと思つて諦めましたよ、昨日は」

「すまん、眠くて周りが見えてなかつた」

はあー、とため息をつかれてしまった。

だが、しうがないではないか、召喚されて、更には戦つて、疲れていない方がおかしい。

「えうですね、まあ、しうがなかつた、と言つてしまつう

諦めてくれたらしい。

「とりあえず、朝食にしましょ、う」

うん、それがいい、昨日、なにも食べてないし。

「頼むよ」

そう言つてベッドから出ようとした時だ。

「ガシャガシャガシャ！」

なんの音か分からぬが、自分達の方に近寄つてくる。

そして…その正体は田の前にやつて來た。

「召喚獣、貴様を我が城に連行する。これは、姫殿下の命令である」

と、これが朝のことだ。

てか、なんで俺、いきなり存在知られてんだ！？

おかしい、なぜ！？

「おー、お前、なぜ廊のところに突っ立てる。早くひりひりに来て  
んか」

これが姫さん？

確かに、可愛いよ？

でもね、言葉遣いあまり悪くないよ？

15歳くらいに見える。

きっと、わがままなんだつなー、あの言葉遣いだし。

「あのー、なぜ俺は姫さんに呼ばれたんでしょつか？」

一番の疑問点を聞いてみる。

「ああ、それはの、昨日の審査員が校長に手紙を出したらしいのじ  
や。まあ、その時たまたま校長室内に我也いてな、手紙を一緒に見て、  
面白うだから連れて来させたのだ」

そして…ニヤリと笑つ姫さんは怖かった。

## 七、飯、食えず（後書き）

次はいつ更新するか分からないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6576j/>

---

異世界から召喚されて

2010年10月10日05時10分発行